

大学卒業以来、建築設計事務所の立場で都市や建築の計画や設計に関わる中で、例えば自然と都市、街と建物、土木と建築、行政と民間、計画と設計と事業と管理、全体と個、経済性と文化性、等々、街づくりに関わる様々な側面からの価値観や取り組みが、相互に理解や連携が上手くなされないまま、街がつくられているという印象を強く抱いていました。

そうした時に、横浜市の仕事に関わる機会があり、完成したばかりの「くすのき広場」を目の当たりにしながら田村明さんとの再会と岩崎駿介さんとの出会いがあり、思いもかけず昭和51年10月にアーバンデザイン担当主査として横浜市に入りました。当時は飛鳥田市政で、都市とそれを取巻く状況も、現在とは大分違っていました。そして、都市デザイン活動は、生まれたての初々しい活力がありました。

市役所に入った後8ヶ月で飛鳥田さんが去り、その後も時とともに変化する様々な状況に応じて、都市デザイン活動の内容や取り組み方は変わっていききました。しかし、横浜の街が大きく変化していくタイミングとも重なり、皆のがんばりで活動を継続することが出来ました。

昨年、定年退職するまでの22年6ヶ月間、都市デザイン室には主査8年、室長8年で計16年在席しましたが、立場が変わった時も都市デザインの視点にこだわり続けながら、横浜の多くの街づくりに関わる事が出来ました。横浜市に入った頃、当時の日本社会の中で都市デザインを進めるには、様々な地域で様々な実践を積み重ねることが最も重要な事ではないかと思っていましたが、半世紀経った今でも、なおその状況は変わっていないと思います。

それは、街がそれぞれに異なり、成長する生き物のようなものであり、都市デザインがその複雑な実際の街を相手に、新たな価値を生み出そうと継続する創造活動だからでしょう。

横浜市の取り組みが、その時々^{時々}の社会や経済状況だけでなく、市役所内外の人間関係やスタッフ一人一人の価値観やエネルギー、力量などによって、そのテーマや取り組み方法が変遷してきたことから考えても、そうした創造活動であることの実感を強く持つわけです。

昨年^{昨年}から、またもや思いがけない縁で、日本の西の果ての街「佐世保」で、都市デザイン担当という立場で街づくりに関わることになりました。初めての土地の新たな現場で、都市の状況が横浜と全く異なる中で、初めてお付き合いをする人々、しかし皆温かい人達とともに、都市デザインの取り組みを始めています。

現在、佐世保駅周辺で、国、県、JRをはじめ様々な事業主体によって、市にとっては100年に一度とも思える多くの大規模な事業が進められており、ドラスティックに変わっていかようとしています。それを、佐世保市の街づくりの視点でどうまとめていくかというのが、まず当面の取り組みの中心です。しかし既に、夫々の事業の計画と骨格は決定されていますし、まだ設計段階にあるものもありますが、具体的な工事が進行しています。今のところ孤軍奮闘に近い状況ですし、今からどれほどの事が出来るのかという思いがある一方、どのような街づくりでも、常に最初から関われるというわけではなく、プロセスの中に様々なチャンスもあるはず^{はず}です。

街の命は長く、街が生き続けていく流れの中で、我々個人が関わる時間はほんの一時です。その中で都市環境の質を高めていく流れや蓄積にどれだけ貢献出来るか。些細な事と思われる事もあきらめずに取り組む姿勢が重要だという、横浜での教訓を梃に、市の職員や市民とのネットワークや共通認識をつくりあげ、佐世保らしい魅力ある街づくりに取り組んでいこうと、新たな気持ちで新たな実践活動に挑戦しています。横浜の都市デザイン頑張ってください。